

通説の転倒

柄谷の「表現」の面白さは、何よりも通説の転倒にある

例えば、われわれは普通、まず告白すべき内容があって、これを一定の表現手段を通じて表明し、伝えると考える。

だが、柄谷からの目からすれば、それは逆で、そもそもはじめから告白されるべき内容などと言うものが存在しない

告白と言う一種の制度ができて、それによって逆に語られるべき内容が作られる、と言うような発想の転倒と出会う。

無論、こうした考えにはすでにフーコーなどの先例がある

だが、柄谷はそのような伝統を様々な場面で展開して見せてくれる
ときにはそれは傍で見るとハラハラさせるほどのアクロバティックでさえある。

漱石の小説は近代的な自我意識の葛藤を描いたものだという通説があれば、それはむしろ漱石の「自我」には収まらない「自然」との格闘だと主張することになるだろうし、マルクスの解釈においては生産過程よりも交換過程が大事だとされるし、最近の例をあげれば、柳田國男の「常人」説が通説になると、いや、柳田は「山人」説を放棄したことなどないと主張する。

こうした一貫した通説伝統の作業は、例えばロマンティックの思想家や文学者たちが試みたレトリックのアイロニーとは異質である

彼はそのような執拗な転倒作業によって、自明視されているパラダイムの相対化を、そうやってよければ、解体を目論んでいるのだ。

それが彼の考える「批判」の基本スタイルがあり、その転倒が読者の意表をつくものであればあるほど、知的エンターテイメントとしての魅力もまた増すのである

この転倒と並んで、というか、それを生み出す方法論として柄谷のディスコースの特徴をなしている**アナロジー、すなわち類比**である

アナロジカル・シンキング(類比的思考)と言うのは、普通思われているような単に2つのものを並べて比べて見るだけのものではない

それは抽象作業の第一歩であり、新たな概念の創出、及び構造の発見である

言い換えれば、抽出される類似点をステップにして、新たなアイデアを生み出すための基礎的方法論なのである

そもそも無から創造するなどと言うものはなく、どんなに「新しい」ものも何らかのデータが出发点になっている

つまりクリエイティブなものとは、データとデータの新しい擦り合わせから生まれ、その擦り合わせ作業においてアナロジーが重要な意味を持っているのである

その事は最近企業の研究所などでも新案開発の方法論として注目されるようになってきているが、(例えばUS ITなど)、このことをもっとはっきり示しているのは先端の自然科学者

たち、とりわけ物理学者たちの作業である

例えば、素粒子論と宇宙物理学と言うミクロとマクロの両極端のアナロジーはもちろんのこと、そもそも彼らが応用する数学との分野どうしの関係も、ある意味でアナロジーが前提となっていると言えるからだ

その事は総じて仮説を立てる研究作業などによく見られる

ここで、ひとつ注意を要するのは、新説発見の方法としての暗示とメタファーとの違いである

メタファーと言うのは、すでに一定の意味内容を前提としている

言い換えれば、それはすでに成立している意味に従属している。

例えばAがBのメタファーであるとすれば、それはあくまでBが持っている**意味を代行表現している**だけに過ぎない

だから、そこからはニュアンスのズレとその効果が生まれるとしても、予期せぬ新しい意味が生じてくると言う事はない

これに対して、アナロジーにおいては原則的に比較される両項に優劣は無い

ひとまず両者の意味がそれぞれ前提とされるとしても、その結合から何が出てくるかがはじめから決まっているわけではない

ちょうど化合によって異なった物質が生まれるように、そこにはAともBとも異なった別の意味が生まれる可能性があるのである

メタファーは安住的であり、アナロジーは冒険的である

アナロジーとは、もともとギリシャ語の「ロゴスに沿って」とか「ロゴスを超えて」の意味を持った言葉である

つまりひとつの**事象からそのロゴスに沿って別の事象への飛躍を行い、その類似から共通の何かを抽出することである**

大事なのはこの「飛躍」である

これがなければ、誰でも思いつくようなありきたりの類似こそ見つかれ、そこに新しい類似性を見出し、それをさらに新しいテーゼやアイディアにまで高めるなど望むべくもない
現在のロジカル・シンキングは膨大なコンピューターのデータをベースにして行われるが、柄谷の場合には驚異的な読書量と記憶力をベースにして彼個人の直感に基づいて行われる
それは時にアナロジカル・シンキングにつきものの誤推理や過剰推理をもたらすこともあり得るが、それがうまく作動した場合はコンピューターには思いもつきようもなかった新解釈として実を結ぶことがある。

通説を転倒する柄谷の「反時代的考察」の大半はそのようにして生み出されている

思想や哲学の世界でこの良い洗礼を示しているのはフロイトの精神分析による解釈であろう

幼児の反応とギリシャ悲劇の類似からエディプス・コンプレックスの仮説を立ててみたり、旧約聖書に記述されたモーゼの末裔の歴史を神経性患者の言説を重ねたりする、ある意味

では奇抜なアナロジーが、ついには精神分析学と言う知の体系を構想させた事は有名である。

柄谷がことあるごとにフロイトを引き合いに出すのも、彼の無意識がその発想法の近親性を感じ取っているからに他ならない

事実、柄谷の場合にもこうしたアナロジーに基づいた論議が随所に見出せる

例えば「戦前の思考」で国学における漢字と仮名の区別に着眼して、それを理と情のディスコミーに割り当てながら、ヨーロッパのロマンチックを重ねたりしたかと思うと、宣長とヘルパーの類比を行ってみたり、「日本精神分析」では谷崎の長編小説からロシア革命と市民通貨を論じるというようにである

彼がたびたび「歴史の反復」を口にする時も、やはりアナロジーが元となっているのは言うまでもないはず

反復の認知は類似の出来事に目をつけることから始まるからである

この類の例を数え上げたらきりが無いが、いずれにせよこれは既成の **Discipline** の枠にとられる限りは、まず出てこない発想であり、ともするとその枠が禁じているものである裏を返せば、柄谷のディスコースの魅力は、こうした **Discipline** の枠を自由に横断する「禁じ手破り」にあると言っていい

彼が「日本近代文学の起源」を発表した時、少なからず「国文学者」たちが眉をひそめた

彼らにはそれが「縄張りあらし」ないし「掟破り」に思えたからである

だが、それから 30 年を過ぎた今日、その「国文学」とカノンの方が解体して、柄谷のの著者はれっきとした「国文学」の研究対象になっている。

海外での日本研究ではなおさらである

つまり、はじめはひとりの書き手のアナロジカル・シンキングが生み出した極めて個人的なアイディアが時代を経てひとつの「学び」の対象として公に承認されているのである。

もっとも、これが柄谷にとって幸いなことだったかどうかは、また別の話ではある

柄谷行人の思考

この辺の出発点は、本人の好んで使った言葉で言えば「単独者」である。

これはしかし、単なる「自我」とか「個人」のことではない。

柄谷の思考は、デカルトと同じように、あらゆるものに対する懐疑を前提にしているが、初期の文学を見ればわかるように、デカルトにおいて最後とされる「自我」がさらに崩れるところまで懐疑を進めている。

その結果として「単独者」なのである。

それはキルケゴールとやったことに近い。

だが、問題はその先にある。

単独者を徹底する事は、よく言われているように、自分の世界に閉じこもってしまうことではない。

その反対である。

自閉とは、あくまで自我が自我であることによって、その壁によって守られた「内」の世界において成り立つものだが、自我が突き破られてしまえば、そもそもそれによって保護されるような「内」など不可能になってしまう。

つまり単独者とは「内」にこもるのではなく、むしろ「外」に支えられる存在のことを言うのである。

それは「自閉」と言うより、むしろ「自開」と言ったほうがよい。

これについての詳しい論議は後にするが、興味深いのは、柄谷の思考が徹底した単独者の立場から外部への意識を経て、ついには「世界」へと広がっていくプロセスである。

とりあえず、ここでは傍証的な事柄については、どういったことにする。

単独者から世界に向けての解放のプロセスは、柄谷の言説活動の場の変遷を見ればはっきりしている。

彼の出発点は狭い日本の「文壇」と言う世界であった。

だが、彼の関心は「日本文学」からまず外国文学へ、さらには哲学、数学、経済学、歴史学、と言う領域へ広がっていった。

この分野と言うトポスの解放とともに、地理上の日本と言う地域を超えて海外にもメッセージが発信されていくようになっていった。

それは具体的にはアメリカ滞在や著作の各国語への翻訳と言う形で行われたが、特に翻訳という問題は重要である

彼はある時期からは、はっきりと外国語(特に英語)に翻訳されることを前提にして書いているからである。

それは表現や引用の仕方に出ているこのことは、1980年代に本人に自覚され始めているが、遅くとも1990年代には明確な戦略的思考となっている。

具体的に証明しよう「日本近代文学の起源」と「世界共和国へ」の2冊の独訳作業に基づいて、まず、それ以前に書かれた「畏怖する人間」や「意味と言う病」、つまり初期の著作は非常に翻訳しづらい著作である。

その原因ははっきりしていて、柄谷はこれらの著作の読者として意識しているのは、狭い日本文壇の「通」たちだからである。

この「通」たちによって「社会化された私」とか「関係の絶対性」と言った概念は、誰によって、またどのようなコンテキストにおいて述べられたものであるかは自明の事柄である

つまり書き手はそれを前提にして書くことができる。
そこには「ナショナルな甘え」とも言うべきものがある。
だが、外国語への翻訳ではそうはいかない。
それらの「自明性」が自明などでは無いからだ。
まして、柄谷がこれらの著作において駆使したレトリックや隠れたメタファー等は、そのまま翻訳しても伝わるべくもない。
その意味で面白いのは「日本近代文学の起源」と言う著作である。
この著作には明治以降の日本の文学者からの膨大な引用がある。
これを論じている柄谷自身の文章を翻訳する事は指して困難な作業ではない。
それはこの部分の文章がイエール大学の学生を相手に講じられたものをベースにしているからである。
これに対して、引用文のほうの翻訳は決して簡単ではない。
とは言え、明治期の古い文体のものが難しくて、戦後のものが易しいと言うわけではない。
例えば、あの鷗外の擬古文は必ずしも翻訳困難ではないのに対して、戦後の吉本隆明や山口昌男の方がむしろ翻訳しづらい。
意外に思われるかもしれないが、吉本、山口の文章は、日本の読者にとって、すんなり意味が伝わる所でも、よく読むと主術の構造があっちこっちで壊れており、翻訳に際して再構成しなければ態をなさないことがしばしばある。
これには無論彼らの個人的な資質もよっているだろうが、少なくとも彼らには日本人以外の読者に読まれると言う意識は薄であったように思われる。
特に吉本に対しての印象が強い。
その意味では柳田國男や田山花袋なども非常に翻訳困難な例である。
柄谷が例外なのは、おそらくその破格のドイツ語能力による。
これを比較すると、柄谷の本文の言語表現は際立って明晰に見えるが、このことは後の「世界共和国へ」でもとはっきりする。
ここでは引用文献を世界共通に出回っているものばかりであり、まず翻訳が原因となって誤解されると言うような事はないだろう。
なぜこのようなことを持ち出すかと言うと、
「日本思想」はこのまでこういう表現に対する「外部の目」を持ってこなかったからである。
文学とか宗教といった分野はそれ自身の宿命として土着性を切り離すことができない(ちなみに、自然科学はそういう土着性が捨象されているが故に初めから「国際的」である)。
無論「思想にも多かれ少なかれそういう土着のファクターはどこまでもつきまとう
だが、少なくともその文脈においてカントやデリダを論じようと言うのであれば、たとえ日本語で書かれようとも、それらとの土俵を同じくする表現努力をしなければ本当ではない
い

確かに眼としてだけならば、こうした意識は英語で自署ものした、かつての岡倉点心和新渡戸稲造にあった

だが、それはあくまで自ら思い込んだ「日本文化」「日本精神」の一方向的宣伝であって、いわゆる外部の言説との交換ないし対話とは言い難い。

つまりそれらのディスコースは「ディアロゴス」とはなっていないのである。

こういう目で眺めたとき、初めて政治的にも経済的にも開かれた戦後世界の「思想家」で、誰が自分の描くものに対してそういう外部との交通意識を持ち得たであろうかと振り返ってみると、絶望的なことに、ほぼ皆無に近いのである

おそらくある時期からの丸山正雄にはこれがあった。

中国の読者を意識した竹内好などもそうかもしれない。

それ以外で挙げられるのは、意外かもしれないが、三島由紀夫と広松渉である。

われわれは三島の「右翼」的偽装に惑わされて逆を考えるか、三島のディスコースは思われているよりはるかに「非日本」的であると思う

その文体がクリアに映るのも、そのせいである。

広松もそのアナクロまでの漢語の対応とは裏腹に、論理が整然としていて意外に翻訳にのりやすい。

そう思えないとすれば、それは、自らのボキャブラリーの貧困を棚に上げて、字面だけで判断する読者の単なる怠慢に過ぎない。

要するに柄谷を興味深いと思うのは、この言説の解放である

つまり単独者と言う極私的な次元から外部への意識が生じてきて、それが「日本」と言う辺境な境界を突き破り、世界にまで広がっていくプロセスが、単に内容面のみならず、言語表現の面でも明確な奇跡を残しており、その術がそのまま日本の戦後思想ないし現代そうなるものを考えていく上で、1つの貴重な事例となっているように思えるからである。

大半の日本のインテリが年齢とともに日本や東洋への回帰を示す傾向があることを考えると、その希少性の価値は増す。

ただし断っておかなければならない。

この「世界」はのっぺらぼうの普遍主義や国際化に迎合する事は全く別の事柄である

柄谷には一貫して「外部」「他者」「差異」「交通」「交換」ということを強調していた

だから世界といっても、ホモジーニアスなどと言うイデオロギーを批判した、あの差異化の精神があくまで生きるような、そういう「世界」でなければならない。

それはまた日本資本主義に領導をされる一元的な経済グローバリズムに対抗するオルターナティブのグローバリズムの試みと言って良い

その意味で「アソシエーション」としての「世界共和国」を唱える柄谷と言う存在は「日本思想」が直面するはじめての自覚的な事例と言えるかもしれない